



— ゴールボールをやってみようっていうことになったきっかけは？

**欠端** 中学まで一般の学校で、高校から横浜市立盲特別支援学校に通ったんです。そこに入学してゴールボールっていう障がい者競技があることを知りました。でも最初は怖くて…。体育の授業だったんですけど、高校1年の時は出来なくて見学してたんです。あざも出来るし、目も隠しているし、結構速いボールを投げる人もいたんで見るだけで怖くて。でも、クラスメートが関東の盲学校の大会に出場したいけどメンバーがいなくてことになって。「カケ！出来るんじゃないの？ ちょっとやってみない？」「えー、怖いけど、わかった、やってみる」ってやったのがきっかけです(笑)

— メンバー合わせから金メダルまでいっちゃうんだ、すごいなあ。

**欠端** 小学校の頃から、体育とか外でドッチボールとか走ったりとか、そういうのは本当に嫌いだったんですけどね。思ったよりも楽しくなっちゃって。

— 何にハマったんでしょうか？

**欠端** 何をやっても自分はダメだと思っていたんですけど、ゴールボールってコートの中では全員目隠しをしているんですよ。全員同じ条件。たとえばドッチボールって自分は弱視だから自分だけボールを当てられたりするのが嫌だなって思ってたんですけど、自分でも出来る競技があるんだなって。投げるのも楽しかったし、きちんとボール止められたらすごく嬉しいって実感できたからですかね。

## PROFILE プロフィール

**欠端 瑛子(かけはた えいこ)** ゴールボール日本代表。1993年2月19日生まれ。横浜市出身。先天性白皮症という病気のため、生まれつき目に障害がある。高校時代、ゴールボールに出会うと、19歳で迎えた2012年のロンドンパラリンピックでは金メダルを獲得。一時、学業と就職活動に専念するため競技から離れていたが、昨代表復帰。父親は元プロ野球選手で横浜ベイスターズに所属していた欠端光則氏。

あなたが子どもの頃に抱き続けた夢は？ アスリートが子どもの頃に見ていた夢、そして夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどいちろうさん。今回のインタビューゲストはゴールボール日本代表の欠端瑛子選手です。

— いきなり出来ちゃった？

**欠端** いや、そんな事はないです。最初は音を聞くのが難しかったです。コート感覚も難しかったですね。コートの中の目印を足や手で触って自分が今どこにいるのかを確認するんですけど、最初は「ここどこ？」って感じてました。

— その欠端瑛子さんが日の丸をつけてロンドンに行った。そして金メダルを取った。スポーツなんか好きじゃなかった人がですよ、それってどんな感じ？

**欠端** それはもう、まさかですよ。まさかこんな出会いをするとは、まさか日の丸をつけて海外の大会に出場するとは。そんなこと全然思ってたんですけど。

— でも、自分のことを引っ張り上げた。

**欠端** そうですね、やりたい事が見つけられたなって感じました。

— いいですね「やりたい事が見つけられた」って。すごくいい。

「楽しい」って話を聞いてたりして、本当にそういうことがしたいんだな、好きなんだなって感じていたんですよ。きっと欠端さんもそういう体験をしてるんだろうなと思ったんです。欠端さんみたいに「スポーツどうかな？」なんて思っている子がチャレンジしてくれると良いよね。

**欠端** そうですね、是非やって欲しいです。

— もしかしらね、同じような子どもたちが欠端さんの事をこの話で知るかもしれないけど、自分に続く後輩になるかもしれない子に欠端さんから伝えるとしたらどんな事ですか？

**欠端** そうですね、「苦手な事でも一度はやってみる」という事を伝えたいですね。自分がそうだったのだから。

— スポーツは欠端瑛子さんを世界やいろんな所に連れて行ってくれるよね、すごい出会いだよ。それにチームメイトやいろんな広がりくれますよね。

**欠端** そうなんです。今考えるとあの時やって良かったなって感じています。

— ゴールボールを知らない人、スポーツとしてゴールボールを見たこともない人にぜひ知ってもらいたい、こういうところを見てほしいとかありますか？

**欠端** 見るってより聞いてほしい。

— 聞いてほしいんだ！

**欠端** 選手も声や音を聞いてプレイをしているので、私たちの声だったり音を聞いてほしいですね。勝っているチームは声がたくさん出て、チームで戦っているっていう雰囲気があるんですよ。こういうふうには掛け合っているからこのチームは勝ってるんだなって、そういうふうにして聞いたらうれしいですね。声が出てないのはひとりだけで戦っている状態だから、息も合わないですよ。ひとりの世界に入っちゃってるんですね。

— そういう時、欠端さんはなんて言ってあげられますか？

**欠端** ナイスボールだよって褒めたり、今の大丈夫？

とか。コミュニケーションですね。

— 見てるよ、感じてるんだよ…と伝えてあげる。ひとりじゃないぞってことです。



**欠端** 盲学校に入ったのも、按摩、鍼、灸の資格が取れる学科があるって聞いたからなんです。そこで資格を取って、就職も按摩とかマッサージの関係に進もうかなって感じだったんです。まさかそこでゴールボールに出会ってそのまま続けるとは全く思ってたんですけど。

— 金メダル取った後の報道でもそうでしたけれど、さすがプロ野球選手のお嬢さんは運動神経めっちゃ良くって、そりゃボール投げたりするのすごいよね、という感じに思われがちですよ？

**欠端** 本当はあんまり運動神経良い方じゃなかったのに(笑)

— 僕は金メダルの報道が出た時に、欠端瑛子さんという名前を知ったんですよ。僕はね、ウィンタースポーツのアイススレッジホッケー選手の友人から「障がい者って過保護な感じがどうしてもあって嫌になっちゃうんだけど、試合になると体ごとぶつかったり出来るのが最高に気持



## 取材を終えて

僕は欠端選手のお父さん、横浜大洋ホエールズ(後に横浜ベイスターズ)の欠端光則投手のファンだった。ハマスタでピッチングを見ているから、つまり、今回の取材で親子二代のプレーを生で見る幸運に恵まれた。欠端瑛子選手はプレーヤーとして本格化するタイミングだ。砂地が水を吸い込むように、経験からいろんなものを今、まさに吸収している感じがした。間違いなく来たる東京パラリンピックの主役のひとりになる。

